

僕が自分の部屋でパソコンに向かって仕事をしていると、また亜麻音^{あまね}がドアを開けて覗き込んできた。

亜麻音というのは僕の姉だが、最近ではよくこういうことがある。家族なので何か用事があれば部屋に入ってくるのだが、最近ではとくに多い。

それは僕があんたの話に姉にしたからだ。

彼女はその話に興味津々で、妙に食いついてきたのだ。

「ユウ、ユウちゃん」

亜麻音がニヤニヤしながら部屋に入って来た。僕は若干うんざり気味だった。入ってくるたびに舌打ちしたくなる。本当に舌打ちすることもあるくらいウザいのだ。特に仕事中は入ってこないで欲しい。せっかく集中しているのに、気分をそがれるのだ。

「新作書いてる？」

亜麻音が言った。

その質問もうザい。関係ねえだろ！ と怒鳴りたくなる。僕の許可もなく、亜麻音は勝手に入ってきてパソコンを覗き込んできた。

そこで僕はため息をつく。亜麻音に当てつけなのだが、本人は気づかないように平然としているのだ。そこでさらに調子が狂い、余計に苛つく。

「なんだよ」

僕は苛立ちを堪えるように言った。本当は顔面を殴ってやりたいくらいにムカついている。

でも本当に殴るわけにもいかないし、家族なのだから、あまり素っ気なくするのも抵抗がある。僕も人が良いのだと思う。いまいち鬼にはなれない。

「ごめんごめん」

亜麻音が言った。

「なに？」

「姉ちゃんね、あれ読んだよ、レズビアンなのよ」

「ああ、あれね」

僕が書いた官能小説の話だ。

「すごいね、あれ。読みながら興奮してきちゃってさ」

亜麻音の言葉に僕は鼻で笑った。

そう。あんな話というのは僕が官能小説を書いて電子書籍で出版している話だった。

小説は高校時代からコツコツと書いていた。何度か文学賞に応募したこともあるが、審査を通ることはなく、賞を獲るには程遠い実力だったのだ。それは自分で書いていても、なんとなくは分かっていた。自分にそんな実力がないことを。

しかし僕はアマゾンの kindle というのを見つけてしまった。そこなら審査ナシで誰でも本を出版できるのだ。

僕は「これだ!」と思って、さっそく書き溜めたミステリ小説をアップした。だが何日経ってもまったく読まれない日々が続いた。

自分でも素人だとわかっているが、さすがにユーザーにスルーされ続けるのは堪える。そのあとも何篇か、アップしてみたのだが、やっぱり読まれることはなかった。

たまに数ページ読まれることはあるが、それだけだった。

これではあまりにも悲しすぎると思い、もっといい小説を書かなければと悩んだこともあったのだ。

僕は現在社会人で、ちゃんと仕事を持っており、毎日会社に通勤している。年齢は二十五歳だ。ちなみに亜麻音は二十八歳。その年齢で未だに彼氏がいない。それも悲しすぎる。

それはさておいて、小説を書くのは飽くまでも趣味の範囲だった。でも、自分としては将来これで食べていきたいと本気で思っていた。

Kindle だと、素人の人でも月一〇〇万以上の収益をあげている人もいる。そういう人が解説している動画を何度か見たことがあり、勉強したこともあったが、なかなか高収入には繋がらなかった。

だが、まったく勉強にならないこともなく、これは使えそうだということだけをメモリ、実行するようにしていた。

あるとき僕は閃いた。官能小説を書いたらどうだろうと。つまりはエッチな小説だ。

世の中の男性のほとんどがドスケベだ。つまりこれは大きなシェアなのだ。エッチな男性は日本にごまんといえる。それを利用しない手はないのだと気づいた。

それから僕はひたすら官能小説を書き始めた。そしたらやっぱり少しずつ読まれ始めたのだ。Kindle では自分の出版した本が、どれぐらい読まれているのかが分かるようになっている。

毎日それを見るのが楽しみになった。

そして僕のその戦略は功を奏していて、売り上げも上がってきた。これは本当に嬉しかった。

そうか、こうすればいいのか――。

ということが判り、僕はがむしゃらに官能小説を書いていったのだ。収益は月ごとに増えていった。出す本、出す本が次々と売れて、読まれていく。

この嬉しさを誰かと共有したいと思ったが、官能小説を書いていることを人に言うのは恥ずかしかった。それは僕一人だけで楽しむことにした。

そうして官能小説を書き続けて二年が過ぎ、出版数は一〇〇冊を超えた。今では安定的に収益を得ている。

お小遣い程度の実入りだったが、ないよりマシだ。なにしろ自分が書いた小説が読まれるのが嬉しかった。

これは経験したことのある人しか解らないと思うが、自分の書いたものが読者に読まれるというのは、本当に幸せなのだ。お金じゃない。

